

聖歌

渡会 克男

♪イエスさん、わてを好いてます。イエスさん強いよってんに、わて弱いけんど怖いことあらへん。わてのイエスさん、わてのイエスさん♪——ふいと思いで出す方言の讚美歌。

私の祖母のあだ名は『イエスさん』だった。老いても陶器のように艶々とした白く上品な首筋、鳥の囀りのような声……神社仏閣が林立する京都にあつて家族の中でただ一人、敬虔なカソリック信者であつた祖母が口ずさむのを聞きながら、幼い私は『イエスさん』というのは祖母の死んでしまった知り合いの人かと思つていた。

「お前に覚えておいてもらいたい人がいるんだよ。でも、絶対に爺ちゃんには内緒だよ」と、祖母が連れて行つてくれたその人の墓——戦艦大和と一緒に南海に沈んでいった若者のために、祖母は墓前に塩を盛つた。

「ヤマトの機関室はものすごい熱さで、塩を舐め舐め焼け死んでいったんじや」。墓碑銘には『昭和二十年四月七日 二十六才』と刻まれていた。

「わてが死んだら若狭の丘の上に葬つておくれ」と言い遺した祖母。

合掌する観音様のような形で焼き上がった祖母の喉仏の骨を見て、「これは誰かによほど愛された印なんだよ」と、祖父は泣いた。

今、遺言通り祖母の生まれ故郷の丘に祖母の骨は眠っている。

けれど、そこから南海は見えず、吹き抜ける銀の風、金の風……祖母はおそらく天国には行かず、風の一部になつたに違いない。

眼下に海を望む丘の上、祖母の十字架の脇には一本の百日紅の木が立っていて、夏になると祖母の若い血潮のように、あるいはキリストの胸から滴る血のように真つ赤な花が咲く。

「わてはあんたが愛おしい。そやけど、わては裏切り者のユダにならなあかんのや」と目を伏せる祖母。「わてよりイエスさんのが好きだとオー、同じ墓には入りたくないだとオー、このババア！」と眉を吊り上げ、祖母を殴つた祖父。

けれど、祖母の死後蔵に籠つた祖父が祖母の一周忌に建てた墓碑銘にはこう記されている。

『我が愛しのイエス、此処に眠る』